

7・13水害における 農学部ボランティアに参加して

自然科学研究科博士2年 森 志郎

私は、昨年8月に中之島町における水害ボランティアに参加しました。

被災から一カ月が経ったにも関わらず、その光景は今でも印象的に思いだされる程のものでした。一階部分がなくなっている家屋や閉店したままのスーパー、町役場駐車場の無料フリーマーケット、炊き出しを行う多目的施設など、私にとって実際に初めてみる光景ばかりでした。また、町の中では被災した家屋の消毒のためにまかれた薬剤の何とも言えぬ臭いが漂っていて、テレビや新聞等で知ることのない状況に驚きました。

一方、私達が作業した水田地帯のうち、決壊した河川の流域は、一時的に修復された堤防に青いシートが張られ、その河川に沿って走る農道のアスファルトはガードレールとともに波打った状態のままといった様子でした。

見渡す限りの水田地帯は、水害の際にそのほとんどが水に浸かってしまったとのことでしたが、一見ただけでは通常の田園風景に思われました。ところが、水田に降りて穂を触ってみると、その穂には実が入っていません。水害によるこのような被害をその時までにはまったく知りませんでした。あの時、福山先生が穂に実が入っていないことを教えてくださなければ、私はそのこと自体に気が付かなかったでしょう。また、農作物に関する保険は、災害に伴った品質の低下による収入の減少には適応されず、今回の水害のようにある程度収穫ができる場合は農家の負担が大きいことも知りました。これらのことは農学部の学生であれば知っておくべきだとも感じています。

この日、私たちが実際に行った作業は、泥で埋まった水路の復旧でした。

今回のように人手があれば重労働といったものではありませんが、実際にこの広い水田にくまなく水

を張る時にはさらに労働が必要になるのでしょう。このように災害の際、しばしば、町の中心部の被害が大きく取り上げられ、一方、郊外や農村地帯の現状があまり伝えられないとの指摘があります。災害地域には、今回の水路の問題のように様々な被害が潜在したのだという認識を持つ人が数多くいなければ、今後も農村地域には目は向けられないのではないかと思います。今回、地元大学の農学部の学生としてその場に居合わせました。このような経験は、地域社会の学生としても、農業分野の学生としても大変貴重であったと思います。

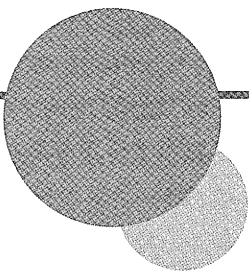
年度末に行われた反省会では、私は参加しなかった日の出来事（町役場の対応の不十分さ等）を聞くことができました。地方の自治体は広範囲の地域を小さな組織で運営し、有事の際はその組織で事態を把握しなくてはなりません。さらに、外部からの問い合わせとなれば、十分な対応が取れないのは仕方がないかもしれません。しかし、このような出来事を自ら感じたり、知ったりすることができた学生は、おそらく、立場が入れ替わったときに適切な対応ができるのだと思います。今回、現場へ入ることに加え、その後に意見交換の場があったことは大変有意義であったのではないのでしょうか。

私は農学部ボランティア活動にただ1回参加したに過ぎませんので大きなことは言えませんが、大学内の多くの方はあまりこのような活動に関心がないというのが実際だと思います。しかしその一方で、反省会でも多く聞かれたように、先導する人がいれば動かされる学生がいることも事実です。現場でどのような作業を行うのが良いかといった議論は別にして、現場を知るだけでも得るものがたくさんあると思います。また、災害後に長く続くことになる復旧の現場についても同様なことが言えるのではないのでしょうか。私は、今回のボランティアや反省会が大

学および学部内で正当に評価され、この事実が今後
に活かされればと思います。また、農学部において
このような活動が行えたのは、災害以前から中山間
地域の農村と交流を行っていたという実績があるか
らではないでしょうか。このような活動の企画やお
世話をしてくださった先生方に感謝致します。

以下に、中越地震を通して感じたことを簡単に付
け加えさせていただきます。7・13水害を超える大きな
被害が出た中越地震では、多くの方がボランティア
活動に参加しました。私の参加した救援物資の積み
替え作業現場にもたくさんの方がいましたし、その

中には農学部の学生もいました。このような大きな
災害を実際に経験したことで、今、多くの人の間に
「助け合いの精神」など共通の認識が生まれている
のではないのでしょうか。このような気持ちや経験が広
く長く保たれて、今後に活かせられれば良いと思
います。私の参加したボランティアは赤十字社が中心
となっており、活動するボランティアは無料で保険
へ加入しました。経験した災害を教訓として、万が
一に備えた様々な制度を作っておくことも重要な
のだと感じます。



ボランティアに参加すること

自然科学研究科修士1年 竹内一成

今回、水害ボランティアに参加して感じたこと、
考えさせられたことが多くあった。中でも一番考
えたのは、大学生のボランティアの人数が少ないこ
とである。参加しなかった学生の理由は多々あると
思うが、その中の1つに講義および試験の存在が挙
げられるであろう。水害が起こったのが7月中旬、
ボランティアの必要な時期が見事に集中講義やテス
ト期間にぶつかって単位のことを考えると、どうし
ても参加できない人が多かったのではないだろう
か。私自身も何回かボランティアに参加するつもり
であったが、実際にはたった1回参加したのみで
あった。この理由としても集中講義に出なければな
らなかつたことが大きかった。被害に遭われた方々
には申し訳ないが、どんなにボランティアに参加し
ようとしても卒業のことを考えると、どうしても自
らのことを優先せざるを得ないというのが事実であ
る。では、どのようにこの問題を解決できるか考
えてみた。そこで、まず言えるのはボランティア参
加者には何らかの優遇措置をとるべきであると思
う。

特に学生という立場から言えば、ボランティアに参
加して欠席した講義を出席扱いにする。もしくは、
参加者には単位を与えるなどの制度があればもっと
参加しやすくなることは必至である。しかし、これ
はボランティアの精神に反するとか、見返りを求め
て参加するのは良いことではないとか、多くの反対
意見が出るであろう。そのような意見ももっともだ
が、ここで考えなければいけないことは、どうい
う理由で参加するのかという事ではなく、いかに参
加しやすい状況を作っていくかという事である。仮
に自分が被災者であって労働力の不足に悩んでいる
としたら、完全に善意だけのボランティアでも、何
かしらの見返りを求めて参加した人であっても、労働
力を提供してもらえるということに関して何ら変わ
りは無く、むしろ善意のみの少数のボランティアよ
りは非常に助かるであろう。また、参加者側から
みても、どのような理由で参加しても何か得られる
ものがあり、その結果、次に何か起こった際には、
一度経験したことを生かして行動できるのではない